



東京女子医科大学学術リポジトリ
<https://twinkle.repo.nii.ac.jp>

Improvement in the postoperative course of salvage esophagectomy after definitive chemoradiotherapy

著者名	佐藤 拓也
発行年	2014-11-21
URL	http://hdl.handle.net/10470/30886

主論文の要旨

Improvement in the postoperative course of salvage esophagectomy after definitive chemoradiotherapy

(食道癌サルベージ手術における術後経過の改善)

東京女子医科大学消化器外科教室

(主任：山本 雅一教授)

佐藤 拓也

Hepato-Gastroenterology 第 61 巻 第 129 号 105 頁～110 頁 (2014 年発行)
に掲載

食道癌根治的化学放射線治療後の再発や遺残に対して行う食道切除手術は他に有効な治療手段が存在しないことからサルベージ手術といわれている。術後合併症発生や死亡率が高いことが問題とされており、手術成績を改善するための工夫の 1 つとして、近年リンパ節郭清範囲縮小などが試行されている。今回、サルベージ手術のリンパ節郭清範囲について年代別に比較検討を行い、切除成績を検討した。対象は 1993 年から 2011 年に施行されたサルベージ食道切除手術症例 56 例のうち、右開胸かつ R0、R1 症例 26 例。前期 15 例 (1993-2002 年) と後期 11 例 (2003-2011 年) に分類し治療前ステージ、術前の状態、リンパ節郭清範囲、術後経過および予後について比較検討した。リンパ節郭清範囲は、前期は 2 領域 7 例で 3 領域 8 例、後期は 2 領域 10 例で 3 領域 1 例であった ($P=0.0191$)。在院死亡は前期 2 例、後期ゼロであった。縫合不全や肺炎は、後期で減少傾向であった。SIRS 期間は後期で短縮が認められた ($P=0.04$)。後期で手術成績が改善したことは、周術期管理や手術手技の改善によるところが大きい。リンパ節郭清範囲が有意に縮小したことも要因の 1 つであると思われる。術後の長期経過は、現在のところ有意差は認められていない。サルベージ食道切除手術は、リンパ節郭清範囲を縮小することにより、早期術後成績を改善する可能性が示唆された。